1 動詞と文型（1）

音声 01.mp3
英文難易度 ★☆☆

①High above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince. ②He was gilded all over with thin leaves of fine gold, for eyes he had two bright sapphires, and a large red ruby glowed on his sword-hilt.

（Oscar Wilde, *The Happy Prince*）

*gild：～に金箔をかぶせる　fine gold：純金　glow：きらめく　hilt：（刀などの）柄

下線部の主語は何でしょうか？

英文法が語ること　第１文型

主語と動詞だけで成立する文（第１文型：SV）

〈主語〉と〈動詞〉という主要な要素だけで成立する文型を**第１文型**といいます。第1文型が表すのは、**「主語が～する」**または**「主語が存在する」**ということです。このうち、「主語が存在する」というときは、**場所を表す語句**が必要となります。日本語で考えても、「彼は滞在している」というよりも「彼はオックスフォードに滞在している」としたほうが、適切に情報が伝えられるはずです。英語でも、He is staying. ではなく、He is staying in Oxford. と場所を表す語句を入れます。ここで、存在を表す第1文型の例文を確認しておきましょう。

Opportunity lies in the middle of difficulty.　（チャンスは困難な局面の中に存在している）

この文の主語は opportunity（機会、チャンス）、動詞は lies（存在する）です。これだけで文が成立していますが、「チャンスが存在する」だけでは、どこにチャンスがあるのかわかりません。そこで、in the middle of difficulty（困難な局面の中に）という、存在する場所をきちんと伝える語句が必要になります。

ちなみに　lie は「（主語が）～に存在する」という意味を表す自動詞で、〈S + lie + 場所〉という形で用いられます。過去形は lay、過去分詞は lain となることも覚えておきましょう。

場所を表す語句を文頭に出す

第1文型について、もうひとつ押さえておきたいのは、**場所を表す語句を文頭に移動させ、主語と動詞の語順を入れ替えた表現が用いられる**ということです。このことを、専門的には**〈場所句倒置〉**といいます。具体的にどういうことか、先ほどの例文をもとに確認してみましょう。Opportunity lies in the middle of difficulty. の場所を表す語句（副詞句）の in the middle of difficulty を文頭に移動させ、主語の opportunity と動詞の lies を入れ替えると、次のようになります。

In the middle of difficulty lies opportunity.

このような形にすると、通常の語順で表された文とどのような意味の違いがあるのでしょうか。語順を入れ替えるのにはいくつかの理由がありますが、ここでは書き手が読み手に対して、**文頭に移動させた部分に注意してもらいたい**と思っていると考えておきましょう。

ちなみに、倒置された文は相対性理論で有名なアルベルト・アインシュタイン（Albert Einstein）の言葉です。アインシュタインは、単に「チャンスは困難の中にある」というよりも、「困難の中にこそ、チャンスがあるのだ」と伝えたかったのでしょうね。

ちなみに (1) 主語と動詞の順序を変えるのは任意ですが、**主語が代名詞の場合は、場所句を文頭に移動しても主語と動詞の語順は変えません**。

(2) 場所句が文頭に移動する理由として**〈情報の流れ〉**も挙げられます。たとえば次の例文では、1文目の公園という表現を受けて、2文目では場所句を文頭に移動させています。

I played with my friends in **the park**. Round **the park** ran a very lofty wall.
（私は友人と公園で遊んだ。その公園のまわりには、とても高い壁がめぐらされていた）

英文法で迫る

下線部の主語は the statue of the Happy Prince で、動詞は stood です。場所を表す High above the city, on a tall column が文頭に出て、主語と動詞の**語順が入れ替わった場所句倒置の形**をとっています。

この文は、オスカー・ワイルドの『幸福な王子』（→ p.26）の冒頭部分です。最初の High above the city は、これから物語が展開する街を見下ろすような高い場所を私たちに意識させます。そして、私たちが俯瞰的に街を見下ろす視点を持ったところで、on a tall column と続け、円柱がそびえ立つイメージを喚起させ、最後に stood the statue of the Happy Prince と王子の像が現れてきます。こうした**俯瞰的な視点が徐々に、特定のものにフォーカスされていく**様子が、物語の始まりにはふさわしいですよね。

日本語訳

街の上にそびえるように、高い円柱の上に幸福な王子の像が立っていました。純金の薄片に全身を覆われ、目には2つの明るいサファイア、刀の柄には大きな赤いルビーがきらめいていました。